

# 東南アジアの民族建築から、日本列島の建築史を読みなおす

井上章一

## 1. 新しい学会の潮流にあらがって

日本には、神社とよばれる宗教施設がある。その建築的な源流は、日本列島へ仏教がとどく前の時代にさかのぼれると、されている。有史以前の高床建物に、形の根はあると、みなされてきた。じじつ、神祇信仰の中枢に位置づけられる伊勢神宮は、今もその古い形をあるていどとどめている。

もともと、日本列島の信仰は、建築化された施設をもたなかった。山や岩、木や森、岬、川、海などをおがむ。自然をおそれ、そのままうやまうのが、本来のありかたであったと、考えられている。じっさい、そういう古い信仰の形を今にとどめた神社も、すくなくからずある。

社殿は農耕儀礼をつうじて、いとなまれるようになった。まずは、仮設の、小さいやしろがこしらえられる。神むかえがおわれれば、あとはとりこわしてもかまわないような施設から、はじまった。時代が下るにつれて、それらはより構築的な祠になっていく。そして、やがては常設の神殿、今日のいわゆる神社社殿へとなりおおせた。神社の建築史は、福山敏男以来、そう説明するのが、一般的である<sup>1</sup>。

だが、20世紀末をさかいに、この福山説をうたがう学説が、うかびあがるようになってきた。

福山以来の説明は、神社のなりたちを、やや牧歌的にとらえている。農民のなかから、おのずと浮上してきたかのような見取図で、歴史をえがいてきた。国家権力の介入が、神社の社殿を普及させたことを、あまり重んじていない。たとえば、律令国家の官社制が、大きくあずかっていたことから、目をそむけている。その点を批判する論者が、このごろはふえている。建築史学の分野では、丸山茂が、その急先鋒にあげられよう<sup>2</sup>。

また、考古学のほうからも、旧来の神社建築史を否定する説が、となえられるようになってきた。有史以前に大型の社殿はなかったと、これまでの通説は言う。もともとは、山や岩をおがんできたのだ、と。しかし、古墳時代や弥生時代にも、大

---

1 福山敏男『神社建築』1949年。

2 丸山茂「神社建築の形成過程における官社制の意義について」1999年『神社建築史論——古代王権と祭祀』中央公論美術出版、2001年。

きな神殿はいとなまれていた。社殿の成立を、ずっとあとへおくらして考える通説は、まちがっているというのである。こちらは、金閼恕あたりが、そのさきがけをなしていただろう<sup>3</sup>。

20世紀の後半には、考古学がさかんになり、発掘の報告もふえてきた。有史以前の集落に関する知見も、ずいぶんゆたかになっている。柱のならび方が、今日の伊勢神宮とよく似た建物の、すくなくらずあったことも、あきらかになってきた。そのことから、大型神殿の存在を、通説以前の時代に想定する声が、大きくなっている。

福山以来の神社史は、今たがいにことなる立場から、はさみうちにされていると言ってよい。ひとつは、民衆社会における律令以前からの社殿発達史を、否定的にとらえる官社制論。そして、いまひとつは、大神殿の存在をはるかにさかのぼってえがこうとする考古学である。仮設の小さい祠が、大きくなっていくというじゅうらいの議論は、今、弱い立場にたたされだしている。

この報告は、しかし、新しい二つの潮流に、したがわない。これまでの通説的な理解を、肯定的に位置づけようとするものである。もちろん、そのことを実証的にあかしだてることは、できない。だが、東南アジアの民族建築例をながめていくと、じゅうらいの通説により強い蓋然性のあることを、感じる。東南アジアの民族研究が、日本の有史以前をさぐるヒントになる。そんな可能性をさぐるふくみもこめて、本題へとすすみたい。

## 2. ピーとカミ

民族学者の岩田慶治は、かつて東南アジアの稲作民族を対象としたフィールド・ワークをこころみた。その成果を『日本文化のふるさと』（1966年）という書物にまとめている。記紀万葉にしるされた日本の生活文化は、東南アジアのそれと、強くひびきあう。そのことを、さまざまな角度から、ときおこした本である<sup>4</sup>。

なかに、タイ族のピー信仰に言及したところがある。東南アジア諸国は、その多くが仏教を受け入れた。寺院建築も、たくさんいとなむようになっている。だが、仏教以前からあった精霊信仰を、いっさいすてたわけではない。たとえば、タイ族は、ピーの信仰を今日にとどめている。あるいは、ビルマのカチン族、シャン族は、ナットの信仰を。また、クメール族には、ニア・ターの信仰がのこっている。岩田は、なかでもタイ族のピーに、強い光をあて、日本的な民俗信仰との通底性を力説した。

建築史的に興味をひくのは、ピーの祠に関する指摘である。岩田はタイ族の集落

3 金閼恕「弥生時代の呪術と呪具」『考古学研究』（第30巻1号）1983年。

4 岩田慶治『日本文化のふるさと——東南アジア稲作民族をたずねて』角川新書、1966年。

が、さまざまな祠をこしらえていることに言いおよぶ。それらをていねいにしらべあげたうえで、ピー信仰の発達史を、つぎのようにまとめてみせた。

いちばん古い第一期は、「浮動するピー」の時期になる。ピーは山河、あるいは、草木虫魚となって人の前に出沒した。所在は不明で、巨木や巨石のもとに臨時の祭場をさだめ、供物をささげる。そうして、ピーをなぐさめる時代が、つまり祠はまだできない時代があった。

第二期は「去来するピー」の時期である。祭りのさいにのみ祠をいとなみ、ピーの降臨を受け入れる。祭りがおわれば、ピーはふたたびもとのところへかえっていく。臨時的に小さな祠をもうける時代が、この第二期にあたると、岩田は位置づけた。

つづいて、第三期だが、これは「常住するピー」の時期にほかならない。バンコクの周辺には、柱上祠、プラブームとよばれる祠がある。そこには、精霊の座像もあり、臨時的なピーの祠とは、発展段階がことになっている。岩田は、ピーの信仰とヒンズー教の神が習合した可能性も、のべていた。あるいは、そういう外来の要素にも、ささえられているのかもしれない。いずれにせよ、そこには御神体がある。常設の祠として、それらはいとなまれているのである。

岩田は、この三期にわたる変容を、日本の信仰史と並行的に位置づける。「ピーのかわりにカミをおきかえさえすれば、そのまま日本のカミ信仰の歴史を語ることになる。それほど両者の類似には驚くべきものがある<sup>5)</sup>」。岩田は、両者を対比的にならべ、そう結論づけている。

もちろん、タイ族のピーと日本のカミには、ちがうところもある。なによりも、日本では神祇が律令国家の指導で、制度化された。各地に一の宮、二の宮が創建され、国家宗教めいたあつかいもうけるようになっていく。だが、ピーにそういうしろざさえはない。岩田も、そのちがいを、こうまとめている。「神社は国家統制ないし地域編成の原理になり、民族、部族の限界をこえて発展したが、ピー信仰は逆にたんなる家族の守護者に転落していった<sup>6)</sup>」。

だが、国家にささえられなくても、ピー信仰は祠をつくりだしている。臨時のそれのみならず、常設的な祠、小さな神社と言ってもいいような施設を、こしらえさせた。小規模な社殿なら、国家的な背景がなくても、じゅうぶんなりたちうる。タイ族のピー信仰は、そのことをはっきりしめしている。

日本列島における信仰施設の発達史を考えるさいにも、この点はあなどれない。小さな仮設の祠が、仏教の感化をへて、大きくなっていく。律令国家とかかわるなかで、より立派にととのえられていった。そういう面も、まちがいはなくあったろうが、自成的な部分を黙殺することは、できない。ピーと同じように、集落の小さな

5 同前、183 頁。

6 同前。

祠がいとなまれた時代は、日本列島にもあったろう。国家などとは、関係なく。

記紀などの文献だけから、歴史を考えれば、あるいは官社制論のようになるのかもしれない。この報告も、そのことはみとめる。しかし、近年の研究者が、岩田らの民族学に目をむけようとしないことには、違和感も覚える。その鎖国的なかまえには、反省をうながしたい。

弥生時代や古墳時代の遺跡からは、よく高床建物の柱穴が見つかる。棟持柱をもうけた建物も、しばしば見いだされてきた。柱跡のならび方は、今の伊勢神宮と、つうじあう。神宮と似かよった建物のたっていたろうことが、しのばれるならび方に、それらはなっている。

そのことから、当該の遺跡にも、神殿らしい施設ができていたとみなす考古学者は、すくなくない。とりわけ、棟持柱をもつ建物に関しては、そうおしはかることが、ふつうになっている。さらに、それらの高床棟持柱建物が大きければ大きいほど、神殿だとする議論はよりたしかな口調で語られやすい。これだけ巨大だったのだから、一般的な施設ではないだろう。宗教的な役割をになっていたにちがいない、と。じっさい、最近の発掘報告書は、たいていそんな書き方をとりいれている。

文献的には、そういう巨大神殿のあったことなど、たどれない。有史以前の信仰は、山や岩などがうやまわれていたことをしるすにとどまる。

ただ、記紀をはじめとする文献記録は、8世紀にならなければあらわれない。そこにしるされた信仰のあり方も、8世紀のそれをしめしてはいるだろう。あるいは、6、7世紀ぐらいの信仰史なら、そこからたどれるかもしれない。しかし、3世紀以前の弥生時代が、そこからおしはかれはしないだろう。だから、弥生時代における巨大神殿の存在を、8世紀の文献でしりぞけることは、むずかしい。神殿肯定説の考古学者たちも、そんな記録で弥生時代は論じられないと言うのが、ふつうである。

ただ、神殿派の考古学者たちにしたがえば、すこしやっかいな宗教史を想定しなければならなくなる。有史以前には、棟持柱＝高床建物の巨大神殿がたっていた。だが、文献記録のつたえる6世紀ごろには、それらがみななくなっている。あとかたもなく、きえさっていた。古くからの神観念は、山や岩にしかとどめられていない。そうみなさざるをえなくなる。巨大な神殿をいとなむ弥生の宗教はついえさり、ヤマト朝廷の成立期には、原始的な自然信仰しかのこらなくなったというふうに。

アニミスティックな山や岩にたいする信仰にさきがけ、巨大神殿をいとなむ弥生時代があった。神殿派の考古学者たちは、事実上そんな宗教史を、想いえがいている。単純な発展史観を、うのみにしはしない。弥生時代あたりに、うしなわれた文明のあったことを想定する。そんな見取図のもとに、このごろは考古学の発掘報告書をととのえるようになっている。そして、私は、その大胆すぎる歴史観になじめない。

伊勢神宮との類似から、神殿の存在をおしはかる考え方も、じつに不可解である。神殿派の考古学者たちは、弥生の宗教文明を、有史以後からきりはなしつつ想定した。にもかかわらず、類推のよりどころを、神宮と似ているところにもとめている。建築形式の成立が7世紀末以前へはさかのぼりがたい神宮に。弥生の神殿論をどうしても語りたいのなら、神宮との類似語りは、ひかえたほうがいいだろう。

さて、東南アジアにも、とりわけ島嶼部では、神宮の柱のならび方が似た民族建築を、よく見る。棟持柱のある高床建築を見かけることが、すくなくない。日本の考古学者たちは、弥生のそういう建物を神宮に似ていると、みなしてきた。しかし、それらは東南アジア島嶼部にのこる民族建築とも、似かよっている。今の神宮よりは、そちらに近かった可能性だって、なくはない。

東南アジアの島嶼部で見かける高床の民族建築には、さまざまな用途がある。住居、倉、集会所、等々である。宗教的な祠もないわけではないが、それらはおおむね小規模なものにかぎられる。ピーの祠で例示したようなミニチュアの家型なら、信仰の対象となっているものもなくはない。だが、大規模なものは、たいてい集会所としてつかわれる。

こうした民族事例にかんがみれば、日本の大型棟持柱高床建物も、集会所だったのだとみなしうる。世俗的なあつまりに供されたのだと、おしはかりたくなってくる。すくなくとも、宗教施設であったとは考えにくい。

これだけ大きかったのだから、宗教的な何かであったろう。近年の考古学は、弥生の大型棟持柱高床建物を、そう位置づけてきた。しかし、この見方は、東南アジアの民族建築に関する知見と、なじまない。むしろ、大きければ大きいほど、宗教とはかかわりのない施設であったと判断せざるをえなくなる。逆に、小さなものなら、祠であった可能性もでてこよう。まあ、ピーの祠めいた施設であったなら、あまりに小粒で、考古学の発掘現場に柱跡をのこさないような気もするが。

ついでにのべそえる。日本では、いくつかの発掘現場で、有史以前の建物が復元されることもある。棟持柱をもつ高床建物も、その例にもれない。それらも、しばしば、かつてはこんなかっこうでたっていただろうというふうに、よみがえらせられている。

もとより、発掘現場には、柱の穴しかのこっていない。だから、柱がどういうふうにならんでいたかは、おしはかれる。だが、それ以上のことは、なにもわからない。それは、骨の化石しかのこされていない白亜紀の恐竜を、皮膚までふくめて復元することができないのと同じである。

もちろん、恐竜図鑑などでは、表皮の具合や色も、えがかれている。しかし、それらは、想像のたまものでしかありえない。現存の爬虫類などから、類推をされているというにとどまる。エクアドルのガラパゴス諸島に生息するトカゲあたりから。

弥生時代の棟持柱高床建物は、しばしば今の伊勢神宮から逆算しつつ、その形が考えられている。神宮をより古樸によそおわせたかっこうで復元されることが多い。

その意味では、神宮にガラパゴスのトカゲめいた役目があたえられていると言うべきか。

しかし、今の神宮と7世紀末の神宮には、すくなくとも差異もある。また、7世紀末のそれが、以前の棟持柱高床建物をどこまでうけついでいたかも、さだかでない。じっさい、神宮の神明造りには、仏教建築からの感化も見てとれる。ここからの逆算には、けっこうあぶなっかしいところがある。

もちろん、東南アジア島嶼部の民族建築が復元の手本になると言いきることも、困難である。ヤップ島あたりの集会所をてがかりにすればいいわけでもない。私は、日本文化らしいものになりたつ前の列島文化は、周辺諸民族の文化もふくめて考えたほうがいいと思っている。現代日本文化からの逆算で、ことをおしはかりすぎるのは、あぶない、と。しかし、この点についてはきめ手がない。

ただ、今さかんにおこなわれている復元が、自閉的な価値観にもとづいていることだけは強調しておこう。あれは、科学的な判断だけでなされているいとなみではない。近代日本の時代精神にうごかされた復元だという一面を、まちがいなくもっている。その意味では、かたよりのあるところみなのだと言っておくことで、この報告をおわりたい。